デフ・パペットシアター・ひとみ

Deaf Puppet Theatre HITOMI

1） 概要

設立：1980 年

設立趣旨：人形劇をより広め、より高め、人形劇に対する社会的・文化的要素に応える一つの方向として聾者と聴が協同する劇団を設立する。

聾者の表現力を生かした、視覚に訴える作品を作ることで、人形劇に新しい表現を拓きたい。そのためには職業化が必要と考える。聾者と聴者が協同する人形劇団としては、単に活動分野を広げるだけでなく、常に作る作品に高い水準を求めるという自覚と責任を持つ意味でも、職業化が必須と考える。

また、聾者の表現活動への参加全般の活性化に寄与したい。

組織：人形劇団ひとみ座が公益事業の為に 1969 年設立した、公益財団法人・現代人形劇センターの企画・制作により運営されている。

人員構成：人形遣い＝6 名（内 2 名が聾者）　　専属の事務局・制作者＝3 名

拠点：神奈川県川崎市

2） 観客

私たちは障害の有無に関係なく、多くの観客に向けて作品を発表している。人形劇というと子どものものと考えられがちだが、多くの公演は観客の割合が、大人 8：子ども 2 という構成が平均的。

聾者の観客に絞ると、聾者の観客は 2 割程度のことが多い。しかし、公演の目的や主催者の状況によっては、半分以上聾者の場合もあるし、また聾者が数人ということもある。

しかしデフ・パペットシアター・ひとみが公演を開始する以前は、特に地方の聾者が、生の演劇（人形劇）に触れる機会は非常に少なかったと考えられるので、これは明らかにデフ・パペットシアター・ひとみの活動の成果と考えている。

また、全国の聾学校での公演やワークショップも力を入れている事業の一つで、これもデフ・パペットシアター・ひとみ発足以前は、なかなか実現できなかったことではないかと考える。聾の子どもたちが小さいうちから生の舞台に接したり、ワークショップで演劇や音楽の体験をするということは、子どもたちの成長にとってとても必要なことと考える。

3） 作品製作＝基本的に聾者、聴者、関係なく理解し、楽しめる作品を目指している。

作品は全国公演を対象に製作する「全国公演作品」と、その他の作品。

全国公演作品は 2018 年 2 月初演「河の童」が第 14 回作品。2～4 年に 1 回新作を作

るというペースで行っている。

その他は7作品。この中には日本聾者劇団との合同製作作品もある。

＜スタッフ＞演出、脚本、美術、音楽、振り付けなどは、外部から招くことも多い。

聾者のスタッフとしては、演出で庄崎隆志さん、美術で安元亮介さん、手話指導で佐沢静枝さん、振り付けで早瀬憲太郎、作・演出で大杉豊さん。

人形劇界では座内スタッフを起用することが多いなか、デフ・パペットは外部スタッフが多いことも特徴。これは劇団創立の理念『新しい人形劇の創造』を目指しているからと言える。

＜仕込み経費＞各種助成金、協賛金、広告費などを集めて、総経費の半分～2/3程度をこれらで補っている。補えなかった分はその後の公演収入から補填していくという方法で、これはその後の運営を圧迫し、厳しい。主に公的な助成金がもう少し潤沢にあると助かる。

＜製作過程＞最新作の製作過程、初演は2018年2月

2016年1月　メンバーによる第1回新作会議、この後何回か繰り返し、

6月　作品決定、演出家に打診

2017年7月　初稿出来上がり

9月～美術製作開始

9月～12月　デフメンバーと演出家のミーティング開始

12月20日から稽古開始

2018年2月22日　初日（川崎ソリッドスクエアーB1ホール ）

＜稽古＞稽古時には手話通訳が必要となるが、外部手話通訳を頼むことはしない。それは経費の問題もあるが、人形劇関係者でないと演出家の言っていることを正確に通訳できないからである。従って出演メンバーが通訳するか、ひとみ座の手話ができる人に演出助手になってもらい、通訳も兼ねてもらう。

通訳が入ることで時間は倍以上かかり、また、聾者が舞台裏にいるような時に演出家が何か注文を出したりした時は、彼のところまで行って連れてくるとか、とにかく、稽古に非常に時間がかかる。

また、「河の童」の舞台監督は聾者が担当しているが、それらの状況を外部のスタッフに理解してもらうことは重要だが、大変な部分もある。

4）公演形態

①　実行委員会形式（これが設立当時からの基本的な公演形態）

制作者が全国各地に出向き、その地域の文化関係者・団体、手話サークル、聾唖協会をはじめとする障害者団体、行政などに呼び掛けて一緒に実行委員会を設立し、公演する。制作者は公演を予定している1年～1年半前に各地に入り、実行委員会の準備を始める。

結成から 38 年間で、約 650 地域で 2600 回公演。

② 主催公演

主に拠点である川崎、東京などで実施する。地方は実行委員会公演で公演の機会はあるが、逆に川崎、横浜、東京などは実行委員会が作りにくく、主催公演で一般の観客だけでなく、演劇・人形劇関係者にも見てもらう機会を作っている。

③ 依頼公演

各地の手話サークル、障害者団体からの依頼が多く、小規模公演や講演、ワークショップが中心。数は少ないが公立会館主催事業。

④ 助成公演

公的・私的助成団体からの支援による公演やワークショップ。

⑤ 学校上演・ワークショップ（文化庁委託公演）

現在は文化庁「文化芸術による子供の育成事業」の巡回公演と講師派遣事業で、毎年小学校 20 校前後で公演、講師派遣事業では全国の聾学校（支援学校）10 校前後でワークショップを実施。

⑥ 海外公演＝13 回（すべて招待公演）

チェコスロバキア、アメリカ、フランス、ポーランド、エジプト、イエメン、バーレーン、アラブ首長国連邦、ニュージーランド、韓国、台湾、カンボジア。

5） 1 年間の活動の現状

実行委員会による公演：20～30 回（助成公演含む）

主催公演：1 年に 1 回程度

依頼公演・ワークショップ・講演：30～40 回

学校上演・ワークショップ（文化庁委託）：50 回前後

「河の童」2018 年 2 月初演

聾学校での音のワークショップ